

岸田文雄首相がめざす宰相像はどんなものか。「強固なチームをまとめあげ、自らもその一員として誠心誠意ことにあたる」。政治リーダーの最大の資質を自著でこう語っている。

9年近くに及ぶ安倍晋三・菅義偉政権時代からのイメージチェンジで疑似政権交代を意識する。宏池会の祖で同郷の池田勇人がかつて安倍氏の祖父、岸信介による対決型の政治を転換したのは因縁を感じさせる。

歴代首相では小渕恵三氏がモデルだろうか。低支持率で船出し人柄を武器に人気を広げた。流行語大賞になった「ブッチホン」も首相の「聞く力」と通じる。

自民党総裁選で小渕氏に挑んだ末に人事で冷遇された加藤紘一氏。「政権は禅譲されるのではなく奪い取るもの」が口癖だった。急逝した小渕氏を継いだ森内閣の倒閣運動、いわゆる「加藤の乱」で失敗し首相レースから脱落した。

加藤派の若手だった首相は乱に加わった。このとき「政治家として勝負をかけたときは、絶対に負け戦をしてはダメだ」と学んだ。そのためか、首相は総裁選後の一連の人事で党内のあちこちに気を使った。徐

首相は「国士」になれるか



岸田首相に求められるのは聞く力とプラスアルファだ（10日、衆院本会議）

々自らの色を出し始めたが、滑りだした大胆さより慎重ぶりが目に付く。

韓国の金鍾泌（キム・ジョンピル）元首相から生前の2004年に聞いた話を思い出す。このとき戦後の吉田茂を除くすべての日本選挙戦に突入したのが一因の首相に会っていた。金氏

は最も印象に残る政治家に池田と大平正芳を挙げ、2人にまつわるエピソードを話し始めた。

首相に就いた大平が国会近くのレストランで「金さんに見せたくて」と手帳から一枚のメモ用紙を取り出した。「死にたくない、死にたくない」とある。池田

姿を伝えた。「最近の日本が亡くなる直前にベッドに身を支えられながら書いた文字だった。

かと言つと、みんな黙って

しまつて残念そうだった。小渕氏もまた聞くばかりではなかった。衆参ねじれ国会を初の自公連立で打開し、当時の金大中大統領と歴史的な宣言を結び戦後最良の日韓関係に導く。主要国首脳会議（サミット）を沖繩で開催する決断も世間を驚かせた。

首相が打ちだした「令和版所得倍増」「デジタル田園都市国家構想」は池田と大平の看板政策のアレンジだ。これから真価が問われるが、政策に気迫がいまひとつ伝わってこない。

世界ではかつてなくリーダーの指導力が試されている。新型コロナウイルス問題にとどまらない。国民の将来の不安を減らす社会保障とその財源、気候変動・脱炭素への道筋、近隣外交や防衛力の強化……。

求められるのは聞く力とプラスアルファだ。首相の境遇を「どす黒いまでの孤独」と例えた元首相もいる。

ときに首相の言うチーム力では乗り切れない勇断がリーダーには必要になる。

「国士」は辞書によると「一身をかえりみず、国家のことを心配して行動する人物」（広辞苑）とある。

志を遂げる環境は整った。

（編集委員 峯岸博）